

長野県立歴史館たより

2024年 **冬**号 vol.121

特集

長野県立歴史館開館30周年記念

令和6年度冬季企画展

佐久間象山



遺墨展

書は人なり

力士雷電之碑(万延元)文久元年、長野県立歴史館蔵

力士雷電信濃小縣郡大石邨人姓關氏父曰半右衛門母
 電生猶有力異其兒獻不類人所為暗者皆駭卒十八九
 五才肢幹如錡而貌温厚自然可親來江戶從力士浦風學
 何以其技冠于天下雷電之號都鄙藉稱之不置上自
 大将軍公以泊列侯屢召使闘技而觀之亦莫不俛狀愛
 其傀力之無能偕抗初雷電入相撲羣其所對敵動有殘傷
 於是其技之老相議禁其手勢尤難當者三人始得安與之
 莫之能勝也歷選力士之徒蓋建彙以來壹人而已矣嘗以
 侯後辭歸以文政八年卒家壽五十九雷電去世二十七幸
 述其祖之蹟傳于無窮乃磐石於其邨之道旁特來謁辭昔
 卿在伏見名妓國兒觀其舞而泣人怪問之曰今天下女
 此女為第壹吾生丈夫不能為天下第一流大有愧於此女
 為雷電識于斯碑亦殆將泣也系曰生環俤嗟雷電力武岡
 信山崇峻信水清駛神氣所鍾迺生環俤嗟雷電力武岡
 出固天恪爾我為士人不能魁琦為爾勤銘心篤忸怩

松城 佐久間 啓子 明撰

30周年に寄せて

長野県立歴史館は、1994年(平成6年)11月3日に開館し、今年で30周年を迎えました。この間、290万人を超える皆様に御来館いただいたほか、多くの皆様に御支援と御協力をいただいたことに、厚く御礼申し上げます。

また、今年4月には、文化行政の一元化により当館は、県教育委員会から県民文化部に移管されました。県総合5か年計画「しあわせ信州創造プラン3.0」には、「県立歴史館の機能充実により、県民の歴史に関する学習や交流の促進を図る」ことが掲げられています。

これまで当館は、長野県の歴史・文化の拠点として、考古資料、文献史料、その他の歴史資料を収集、整理、保存及び調査研究し、展示及び閲覧等により、文化財に対する理解の促進や歴史学習を支援する役割を担ってきました。

史資料の収集、整理、保存等については、先日、NHKの「ザ・バックヤード 知の迷宮の裏側探訪～本当の“知”は、裏にかくされている～ようこそ奥深いウラの世界へ！」という番組の取材がありました。この番組は、俳優の中村倫也さんが案内人となり、博物館や美術館などの普段見ることができない裏側に潜入するという番組です。

当館では、発掘された木製品の泥などを洗い落とし、大型の処理槽で、木製品に含まれた水分を



写真1 木製品保存処理のようす

ポリエチレングリコールと置き換える保存処理を行っています。

この作業は、1年半から2年程かけて行いますが、約3ヶ月毎に500kgのポリエチレングリコールを処理槽に溶かし、温度

を約60℃に維持しながら、濃度を上げていく作業を繰り返します。歴史館のかくされた奥深いウラの世界の一つです。(写真1)

また、展示については、常設展示に加え、春夏秋冬の企画展を開催しています。開館30周年となる今年度は、夏季企画展「疾風怒濤～文書と絵画でみる義仲の一生～」と秋季企画展「描かれた川中島合戦～屏風・錦絵に描かれた戦の世界～」で、華麗な屏風や古文書などから見えてくる事実を読み解きました。

令和7年1月からは、冬季企画展「佐久間象山遺墨展」を開催します。佐久間象山は、幕末の思想家ですが、書家という面に着目した企画展です。

この企画展では、書家の川村龍洲氏から御協力をいただいておりますが、今年8月、同氏から開館30周年を記念した看板をご寄贈いただきました。板は上松町の池田聡寿氏からご寄贈いただいたヒノキ材で、現在、館のエントランスホールで掲示しています。(写真2)



写真2

令和7年度も、春季企画展「所蔵品展」、夏季企画展「安曇野(仮)」、秋季企画展「疫病撤退！除災祈願の考古学(仮)」、冬季企画展「霊場小菅(仮)」を予定していますので、是非御期待ください。

昨年度は、約1万人の小中学生が学校訪問で訪れました。一般の方向けにも、県立歴史館講座、考古学体験講座、古文書講座、お出かけ歴史館や出前講座等も開催し学びを支援しています。

県立歴史館は、引き続き、奥深いウラの世界での“知”の成果を県民の皆様に還元しつつ、他の県施策との連携を図りながら機能充実を目指してまいります。(館長 小松健一)

【秋季企画展】

描かれた川中島合戦 ～屏風・錦絵にみる川中島合戦～ をふりかえって



展示室の様子（和歌山県立博物館所蔵の屏風）

本企画展は、2024年（令和6年）10月12日から11月24日までの期間で開催しました。

『甲陽軍鑑』に基づいて武田側の視点で忠実に描いた柏原美術館所蔵の屏風（岩国本）、『北越軍記』等にみられる上杉側の視点で描いた和歌山県立博物館所蔵の屏風（紀州本）には、様相は異なる信玄・謙信の一騎打ちの場面が描かれ見応えがあったのではないのでしょうか。岩国本の発注者が誰なのか定かではありませんが、紀州本制作の裏に紀州藩主徳川頼宣よりのぶがおり、兄であり時の将軍である徳川秀忠への対抗意識があったと推測する説にも関心をもたれたのではないのでしょうか。屏風には描かれていない面にもドラマがあることを感じていただけたことでしょうか。また、屏風はデフォルメがみられる美術品として位置づけられるものの、壮大かつ緻密な画面からは伝わる合戦像をみることができたことでしょうか。

江戸時代後期から明治時代はじめにかけて身近に楽しむ絵画として広まった錦絵は、当時の風俗や話題の最先端を画題にし、趣向を凝らした描写で人々の目を引き、役者絵、美人画、武者絵などはプロマイドのような存在で人気を博しました。

この時代になると、川中島合戦の様子は人々の娯楽として出版・絵画などの分野で活用されたものとなりました。

しかしながら、川中島をめぐる武田信玄・上杉謙信間の抗争は、1561年（永禄4年）の合戦後も衝突がありました。この頃、上杉方の信濃の前衛拠点は直線距離で根拠地の春日山城まで約40kmの飯山城を

防衛ラインと考えたのでしょうか。1564年（永禄7年）、川中島に再び出陣した両雄は対陣だけに留まり、兵を退いた謙信は飯山城の改修を指揮して、越後に肉薄する武田軍への備えを強固にしました。1568年（永禄11年）7月に武田勢は飯山城を攻撃していますが、10月には飯山城を落とせないまま撤退したといえます。退却した武田勢は、矛先を南に変え駿河へ侵攻し、上杉勢は叛旗を翻した本庄氏へ向かい、以後、両雄が対陣することはなかったようです。

信玄や謙信の名言・逸話は、現在でも「ビジネス術」「人生訓」等で語られます。また、鎧兜に身をつつみ、槍刀を持った勇壮な武者たちが練り歩く行列や騎乗した上杉・武田両軍が駆け回る祭りは、現在でも山梨県や新潟県、山形県で毎年行われています。地元では今も“信玄公”“謙信公”の呼び名で愛されています。しかし、今回の屏風の至る所で描かれる斬り合いイメージがそこどれほどあるでしょうか。この企画展を通して現在世界で起きている紛争も含め、自分自身がどう生きるかを問われているように感じます。

（黒川稔）

冬季企画展

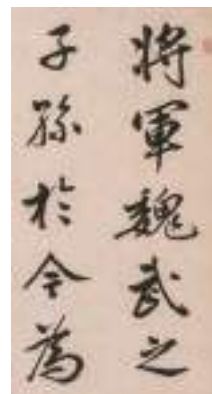
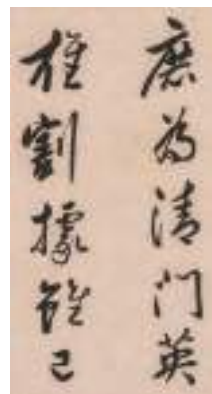
佐久間象山遺墨展 ～書は人なり～



中村不折筆 佐久間象山像
1913年(大正2年) 信濃教育
博物館蔵 信州高遠美術館寄託



七言古詩「丹青引贈曹將軍霸」
1851年(嘉永4年) 藤屋御本陳蔵



令和6年(2024年)度は、松代出身の儒学者で砲術や医学などの洋学にも通じた佐久間象山(しょうざん/ぞうざん、1811～64)が、京都で非業の最期を遂げてから160年の節目の年にあたります。象山は、幕末の先覚者としてあまりにも有名ですが、中国文化にたいする深い教養を持つ「文人」としても一流で、とりわけその「書」は生前より高い評価を受けていました。象山と同じ松代出身の医師で象山研究者・コレクターでもあった宮本仲^{なかつ}(1856～1936)によれば、象山は「単純に書家としてのみ考えても、既に堂々たる大家の域に至ったと言うも、敢て過褒^{かほう}ではあるまい」といいます(『佐久間象山』1932年)。

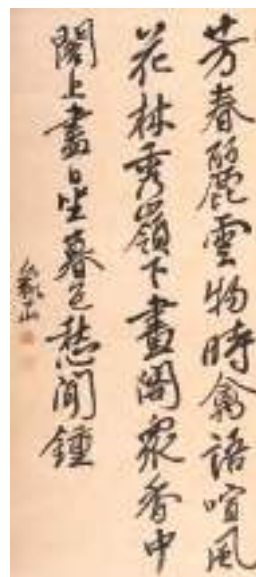
さて、幕末において激動の生涯を送った象山は、松代藩の武家に生まれ、朱子学をはじめとする和漢の学問を身につけ、1853年(嘉永6年)の黒船来航とともに西洋事情探索と国力充実の必要性を強調しました。象山は、日本の対外的危機を脱するためには、優越した西洋の科学技術を吸収して国力を充実させなければならないと考えつつ、朱子学^{かくぶつぎゅうり}の格物窮理(物事の道理を極めて知識を深める)の観念を通すことで、盲目的ではなく慎重に西洋の科学技術を理解、導入しようとしたといえます。その思想を端的に言い表したのが、有名

な「東洋道德西洋藝術」という一節です。

このように、単なる洋学者ではなく、東洋の旧知識にも通じた象山は、当然のように書^{うひつ}を得意としました。象山の父・国善は松代藩の側右筆を務め、その後表右筆組頭へと出世しています。幼少期より、能筆家であった父から書^{うひつ}を習った経験が、書家・象山の基盤となったと考えられます。

加えて、若くして東晋^{とうしん}の王羲之^{ぎし}・王献之^{けんし}を手本に学び、さらに30代後半には唐^{かん}の顔真卿^{しんけい}の拓本を入手し、臨書につとめたことを契機に、その作品は、細身で繊細な草行書から、顔真卿の強い影響を感じさせる厳格で力強い行書へと変化してゆきました。

象山の壮年期以降の書は大きく二つに分けることができます。一つは顔真卿風の豪壮で勢いのある行書。もう一つは、かつて中国陝西省^{せんせいしやう}に存在した褒斜道^{ほうやどう}の修理開通を記念して道沿いの岩壁に刻まれた「石門頌^{せきもんしやう}」(後



五言詩「芳春麗雲物」
千曲市教育委員会蔵



「漢陽君孟文石門頌」(部分)
(左半分は象山の跋文)
真田宝物館蔵

漢・建和2年(148年)に学んだ隷書です。

揮毫の目的や形体、あるいは依頼者の意向に合わせて自由自在に字体を書き分けることができた象山は、行書は主に書幅や屏風に、隷書は石碑や扁額に用いています。なお、自作の注などには、均整のとれた格調高い小楷の作例を見出すことができます。

また、絵画は独得したといいますが、数こそ少ないものの水墨による山水図や道綽人物画は、どれも余技とは思えないほどの出来栄です。ここからも、文字どおり「文人画家」象山の芸術的才能を見て取ることができるでしょう。

こうした遺墨は、地元旧埴科郡内を中心に北信地域には数多く残されています。しかも、その年代が幼少期から晩年までに及ぶため、象山があらゆる書法を体得していった様子を追うことが可能です。

さらに、長野県内には象山を支えた八田家、関家など地元の有力者など交流のあった人たちに宛てた書簡も数多く伝えられてきました。これらは、象山の日常をうかがうのに有効だけでなく、その人となりやを彷彿させる貴重な資料でもあります。

本展では多方面に活躍した象山の業績のうち、地元に残された書と文人画を中心に、象山がこよなく愛した顔真卿の「魯公三表」「争座位帖」、「石門頌」、そして「瘞鶴銘」といった貴重な拓本とその臨書を同時に展示します。

さらに加えて、象山自筆の書状とそれらに関連したオランダ語の図書、望遠鏡、地震予知器、短銃などといった「実物」資料も併せて紹介します。

本展によって、書法を厳格に追究した幕末の文

人としての側面と、日常を生きた人間としての象山の両面を身近に感じていただけたら幸いです。

(林誠)



「海舟書屋」 個人蔵 真田宝物館寄託



紙本水墨山水図 個人蔵
長野市指定文化財

会 期：
2025年(令和7年)1月11日(土)～2月24日(月・祝)
*会期中、作品の展示替えをおこないます。

関連行事：
トークセッション 1月25日(土) 13:00～
登壇 驥山館館長 川村龍洲氏、
台東区立書道博物館学芸員 中村信宏氏
講演会 2月15日(土) 13:00～
講師 真田宝物館館長 降幡浩樹氏

同時開催：
高等学校書道班・書道同好会との共催企画
出品 屋代高等学校書道班、屋代南高等学校書道同好会

歌川貞秀 《神奈川横浜新開港図》

— 活気あふれる幕末の横浜を描く

1858年（安政5年）、日米通商条約が締結され、翌年6月、江戸幕府は新たに神奈川（横浜）を開港しました。以後、横浜の貿易額は急増し、翌1860年（万延元年）には輸出入ともに長崎を上回ります（なお、輸出品のうち断然多かったのが、信州産などの生糸です）。

新しい開港地として急速に変化する横浜。その姿をいち早く伝えたのが、浮世絵版画「錦絵」の板元と絵師たちで、後に彼らは「横浜絵」と称される浮世絵の新しいジャンルを誕生させました。横浜絵は、開港一年後の万延元年から翌年にかけて全盛期を迎え、横浜は浮世絵の主要な画題となります。

一方、通りを行き来する様々な人々や文物を描くことから「往来物」の別名もあります。今回紹介する《神奈川横浜新開港図》は、典型的な「横浜絵」にして「往来物」の代表作です。

まず、錦絵の基本情報から確認してみましょう。作者は、「五雲亭」こと歌川貞秀。国貞門下の浮世絵師で、地図的な鳥瞰図の一種「通覧図」や「横浜絵」で高く評価されています。次に、検閲を通過した証である改印[㊦]（申二改）は万延元年2月を意味し、板元印[㊧]は江戸の板元・山口屋藤兵衛を表わします。

描かれているのは、横浜本町通りです。幅一杯に広がる通りは、手前から一丁目…五丁目と続いています。線遠近法を駆使した大胆な構図が斬新ですが、建物の消失点と水平線の位置関係など、

不自然さは感じられません。

画家の立ち位置は、左右の建物の一階の屋根あたりですが、そうだとすると、前景に描かれた平屋の屋根の位置はあきらかに間違っています。ところが、前景の屋根を正しい（より高い）位置に配置してしまうと、今度は、作品の最大の見どころが台無しになってしまいます。というのも、画面中央下部の空間いっぱい配置された、通りを行き来する人々や動・植物こそが「往来物」の真骨頂だからです。

左側手前の建物には、横浜に出店した三井越後屋の商標が大きく描かれています。生糸を満載した荷車の移動は4人がかりです。他には、異国風の大道芸人、大きな魚を啜えた泥棒犬とそれを追いかける魚屋もいます。通りに満開の桜が生えているのは唐突で不自然ですが、よく見ると木は菰で根巻きされており、二人の植木屋がそれを運んでいることに気づかされます。

中には別作品からの切り貼りと思しきモチーフも散見されます。しかし、不思議と合成絵画にありがちな散漫な感じはなく、あたかも一定の時間に往来するイメージを一枚の画面に再配置したような幻想的な作品となっています。

開港直後の横浜という時空は、密度の高い画面配置と、規則にとらわれない自由で柔軟な構図によって、ひとつの画面に封じ込められたといっ

（林誠）



歌川貞秀画

《神奈川横浜新開港図》

1860年（万延元年）、多色摺木版画（錦絵）、長野県立歴史館蔵

考古資料収蔵 30年間のあゆみ

令和7年度春季企画展「所蔵品展 原始」を開催するにあたり

開館30年を迎え、数多くの考古資料が収蔵されました。土器や石器だけでも3万箱に及びます。当館は、主に長野県が発掘調査した遺跡出土品を収蔵しますが、北信地域を中心に長野県の歴史探求にとって、極めて重要な資料ばかりです。これまで重要文化財や長野県宝を中心に公開してきましたが、今回はその機会が少なかった資料や公開されていない資料に視点をあてて展示します。

また今年、『長野県史』考古資料編刊行後、36年にあたります。佐久市香坂山遺跡発見の日本列島最古級の旧石器、茅野市棚畑遺跡発見の縄文時代中期の土偶「縄文のビーナス」、中野市柳沢遺跡発見の弥生時代中期の銅戈・銅鐸埋納遺構など、歴史を書き換える大発見が続いています。こうした県内各地の発掘成果も、当館が所蔵する考古資料と一体をなして、新しい長野県の歴史を構築してくれるものと考えられます。したがって歴史に関わる本質的価値の高い資料にあっては、当館が所蔵する複製資料も合わせて展示し、所蔵のない資料については、県内各機関より借用させて頂きました。

主な展示は、旧石器時代では日本列島最古級の磨製斧形石器、様々な型式のナイフ形石器、槍先形尖頭器の製作遺跡を扱います。

縄文時代では草創期終末の表裏縄文（押型文）土器、早期の立野式や樋沢式の押型文土器、「向六工式（仮称）」の絡条体圧痕文土器、前期初頭の塚田式等の縄文尖底土器、中越式土器と石匙や装身具、前期終末期の晴ヶ峯式土器と特殊な装身具セット（列島で2か所）を扱います。中期中葉では、中部山岳の「井戸尻文化」と「縄文農耕（仮説）」、中期後半の曾利式土器、後期前葉の北村遺跡縄文人骨（襖被り葬）と副葬品、注口形土器と内面装飾の発達した浅鉢形土器、晩期後半の氷

式土器（浮線文土器）と特殊な有茎石鏃、土器棺再葬墓と「黒曜石散布（仮説）」を扱います。

弥生時代では、中期後半の長野県南北地域圏の確立（栗林式土器と北原式土器）、大陸系磨製石斧の製作、後期の鉄器化と石製農具の継続（箱清水式土器と中島式）、「赤い土器のクニ」を扱います。

古墳時代では、前期の豪族居館と祭祀具セット、中期の木製品の製作（農具と武具・馬具）、列島最古級の木製鐙、日本列島最古級の「（内面）黒色土器」、シナノでは珍しい埴輪の樹立、後期古墳と銀象嵌大刀を扱います。最後に、信濃国成立前夜として、列島3か所とされる峠の祭祀（神峠・雨境峠・入山峠）を扱い、律令国家へのあゆみとして、信濃国印と正倉院御物（いずれも複製）を展示して終わります。



人体文付有孔罎付土器
（南箕輪村久保上ノ平遺跡 南箕輪村教育委員会 県宝 複製）

一方、当館小展示室では、30年間に機関や個人から寄託・寄贈を受けた考古資料を展示・公開するとともに、これまでに開催された考古資料に関わる当館企画展のポスターを展示します。

長野県の原始時代、特に日本考古学に長野県の考古学（考古資料）が寄与した役割、遺跡・遺物の特質とその重要性が分かる展示を行いますので、ぜひ、ご観覧ください。（町田勝則）

INFORMATION

■ 2024年(令和6年) 2025年(令和7年)

12月～3月の行事予定

12月

企画展・所蔵品展

講座・イベント

休館日
2・9
16・23
29～31

クリスマスリースづくり

12月1日(日)

近世史セミナー

12月7日(土)

県立歴史館講座⑤

12月14日(土)

考古学体験講座③

12月15日(日)



表紙写真の解説

佐久間象山「力士雷電之碑」

(万延元～文久元年・1860～61)

紙本墨拓 長野県立歴史館蔵

小県郡大石村(東御市)生まれで、無双の強さを誇った力士・雷電が右衛門(1767～1825)の業績を称えた石碑。象山は、後漢時代の名品「石門頌」(原碑：建和2年・148)の拓本を愛蔵し、臨書につとめた。その成果を遺憾なく発揮した隷書の代表作。

行事アルバム

* 秋季企画展「描かれた川中島合戦」 *



大盛況のうちに幕を閉じた、秋季企画展「描かれた川中島合戦」。川中島合戦が終結して460年の節目の今年、県内外の皆様のご協力でクラウドファンディングにより購入した「武田信玄書状」をはじめ、屏風や錦絵を中心に、人々に語り継がれてきた戦いに触れようと、多くの来館者の方が熱心に観覧されていました。笹本正治特別館長と守屋正彦山梨県立博物館館長の講演会、当館職員の講座にも多くの参加者に集まっていたり、賑やかなイベントとなりました。

* 秋季企画展講演会「川中島合戦の真実」 *

講師：笹本正治(当館特別館長)



秋季企画展の講演会「川中島合戦の真実」では、笹本正治特別館長の講演をお届けし、川中島合戦を見つめなおす魅力あふれる90分となりました。新しい視点から改めて川中島合戦を捉え、460年前の戦いから現在世界で起こる戦争を考え、本当の幸せとは何かを問う熱い姿に、会場は大いに盛り上がりました。

1月

冬季企画展

休館日
1～3
6・14
20・27

佐久間象山遺墨展

～書は人なり～

1月11日(土)～2月24日(月・祝)

■ 企画展トークセッション

「書家としての佐久間象山」

1月25日(土) 13:00～

登壇：驥山館館長 川村龍洲 氏

台東区立書道博物館学芸員

中村信宏 氏



出典=国立国会図書館「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait>)

■ 企画展講演会

「佐久間象山研究の現在」

2月15日(土) 13:00～

講師：真田宝物館館長 降幡浩樹氏

■ 同時開催

高等学校書道班・書道同好会
との共催企画

出品 屋代高等学校書道班、
屋代南高等学校書道同好会

県立歴史館講座⑥

2月1日(土)



2月

休館日
3・10
12・17
25～28

3月

所蔵品展

休館日
3・10
17・21
24・31

原始

～開館30年の成果展～

3月15日(土)～6月15日(日)

歴史館講座⑦

3月1日(土)

古文書入門教室

3月20日(木)

親子映画会

3月20日(木)

3月22日(土)

3月23日(日)

長野県立歴史館たより 冬号 vol.121

2024年(令和6年)11月29日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市大字屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: <https://www.npmh.net/>

印刷 有限会社アツツーロ